

Muse

帝国データバンク史料館だより[ミューズ]

TDB Historical Museum

2010.11
VOL. 12

巻頭特集

日本の会社展
第2回

“輝”業家

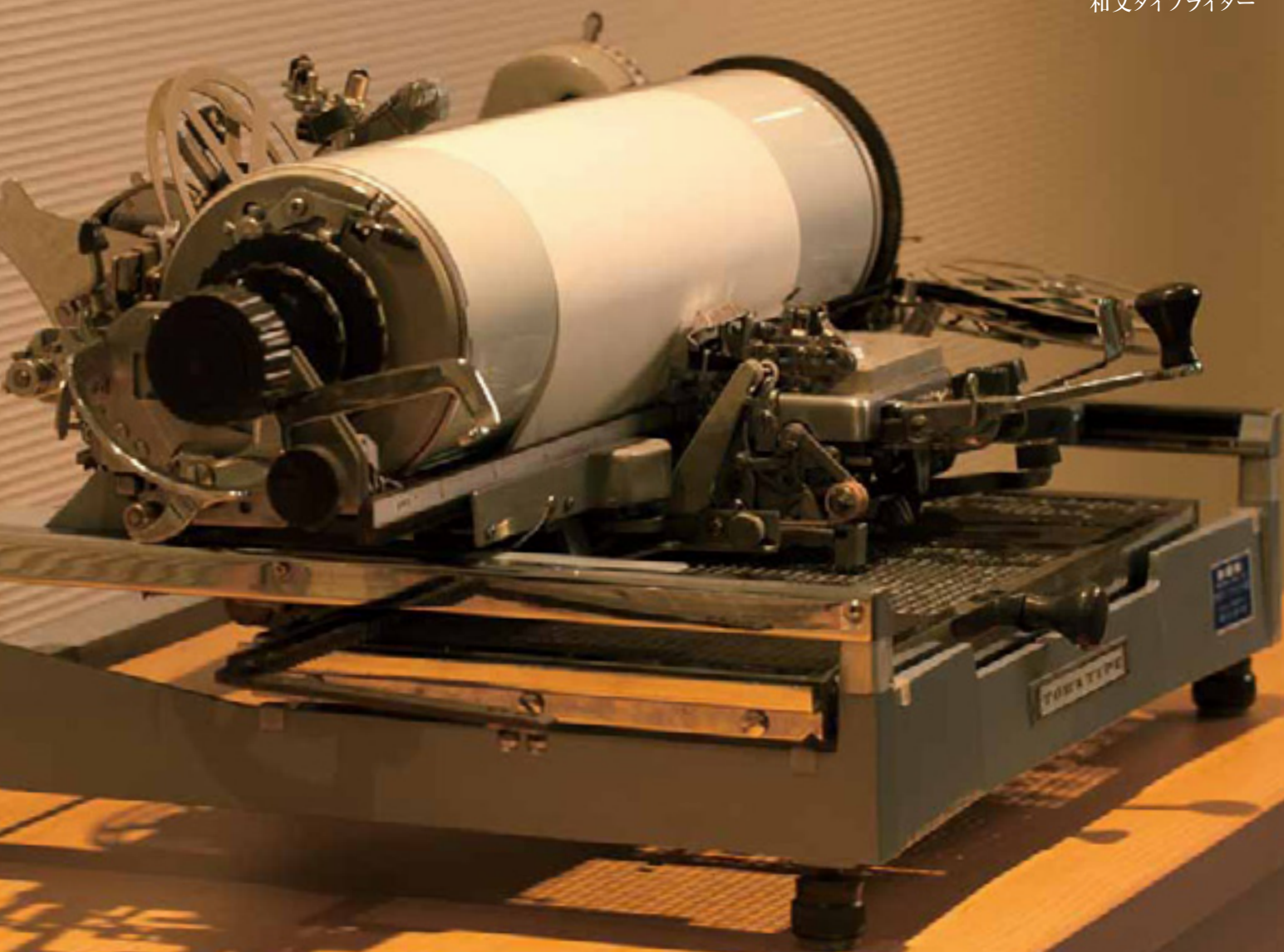
—古往今来—
開催報告

産業遺産探訪①

鶴見・川崎 京浜工業地帯

学芸員ファイル FILE No.001

2000文字を操る文書作成器
和文タイプライター





日本の会社展 第2回

催 告 開 報 巻 頭 特 集

“輝”業家 —古往今来—

【展示概要】

帝国データバンクが創業110周年を迎えた2010年3月3日から始まった本展では、ビジネスマンや学生をはじめ、展示されている“輝”業家それぞれに思い入れのある方など、多くの方にご来館いただいた。

本展は大きく分けて3部構成となっており、まず最初の導入部分では、「ヨクマナビ、ヨクアソベ。」と題して、世界の子ども写真と江戸時代の子ども浮世絵を展示した(写真①)。浮世絵からは、立身出世を目指して学び、そしてさまざまな年代の子と遊びながら社会性を学んだ子どもたちの様子が垣間見える。また国籍は違えど変わらない子どもたちの純真無垢な笑顔には、多くの可能性が秘めていることに気づかされる。近代日本を形づくった企業家・実業家たちも、このような子ども時代を経て“輝”業家になったように、今の子どもたちにも夢を持つて大きくなくてはいいという願いを込めた導入展示であった。

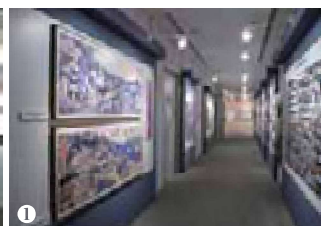
帝国データバンク史料館では、2010年3月3日から4月25日の50日間にわたり、第2回目の特別企画展を開催。日本の近代化を経済活動によって推し進めた企業家・実業家を“輝”業家としてとらえ、その業績を紹介した。ここではご来館御礼も込め、あらためて同展の報告をお届けする。

メインの展

示は「“輝”業家—古往今来—」である。

経営史の専門家10人が選んだ“輝”業家をパネルで紹介、日本の代表的“輝”業家400人をデータベースで公開した。

さらに未来の“輝”業家である現在活躍中の企業家の声、日本の社長分析結果を展開した。最後は創業110周年の記念展である、帝国データバンク創業110周年「飛翔跳躍」(写真②)。3人の歴代経営者をたどりながら、110年の歴史を振り返った。同会場では「追憶の大地」TDB海外支所の記録」を上映。こちらは現在でも常設展映像コーナーにて上映している。



経営史専門家10人が 選出した“輝”業家

近代日本を形づくことに貢献した企業家・実業家を
経営史の専門家10名に5人ずつ選出していただき、のべ
27人の“輝”業家が挙げられた。そのうち9人は2票以
上、残りの18人は1票ずつ入った。

“輝”業家選出にご協力いただいた
経営史専門家の皆様

(肩書きは2010年3月現在のもの。敬称略)

三島康雄(奈良県立大学名誉教授)
森川英正(元慶應義塾大学教授)
由井常彦(明治大学名誉教授)
宮本又郎(関西学院大学教授)
宇田川勝(法政大学教授)
武田晴人(東京大学教授)
柴孝夫(京都産業大学教授)
橋川武郎(橋大学教授)
阿部武司(大阪大学教授)
柏谷誠(東京大学教授)

“輝”業家27人のリスト

渋沢栄一	川崎正蔵	笠井真三
松下幸之助	伊庭貞剛	鈴木恒三郎
小林一三	益田孝	松永安左エ門
野口遵	岩崎弥之助	野村徳七 (三代目)
本田宗一郎	山辺丈夫	出光佐三
岩崎弥太郎	山口吉郎 (兵衛三代目)	石橋正二郎
莊田平五郎	金子直吉	西山弥太郎
中上川彦次郎	平生飢三郎	豊田喜一郎
小平浪平	豊田佐吉	井深大

“輝”業家ベストナイン

渋沢栄一《7票》

しぶさわえいいち
1840(天保11)年〜1931(昭和6)年

関係会社…第一国立銀行(みずほフィナンシャルグループ)、抄紙会社(王子製紙)、東京株式取引所(東京証券取引所)、日本郵船、帝国ホテル他

1867(慶応3)年、パリ万博使節随員としてヨーロッパを訪れ、先進国の経済社会システムを学ぶ。大蔵省を退いた後、第一国立銀行設立を皮切りに500余の株式会社を創立・育成する一方で商業教育や女子の高等教育にも積極的に取り組んだ。

松下幸之助《6票》

まつしたこうのすけ
1894(明治27)年〜1989(平成元年)

関係会社…松下電器産業(パナソニック)、松下電工(パナソニック電工)

尋常小学校を中退し、9歳で丁稚奉公に出る。23歳の時に妻・義弟ら5人で電球ソケットの製造販売に着手。翌年の1918(大正7)年、「松下電器器具製作所」を創設。80(昭和55)年には各界の指導者育成のために私財を投げ打って「松下政経塾」を開塾した。

小林一三《4票》

こばやしいちぞう
1873(明治6)年〜1957(昭和32)年

関係会社…真面有馬電気軌道(阪急電鉄)、阪急百貨店(阪急阪神百貨店)、宝塚唱歌隊(宝塚歌劇団)、東宝

三井銀行勤務を経て真面有馬電気軌道の設立にかかわる。都市近郊私鉄の経営多角化のビジネスモデルを確立した先駆者。1929(昭和4)年、阪急百貨店を開店。また「東京宝塚劇場」「阪急ブレイブス」を創設。宝塚歌劇団の脚本を手がけるなど芸術面でも活躍した。

野口遵《3票》

のぐちしたがう
1873(明治6)年〜1944(昭和19)年

関係会社…日本窒素肥料(チッソ)、旭ペルグ絹糸、旭化成、積水化学工業

1908(明治41)年に「日本窒素肥料」を創業。21(大正10)年にはアンモニア合成の特許を獲得し、日本初のアンモニア合成工場を設立。29(昭和4)年ベンベルグ絹糸製造に着手した。電源開発・アンモニア事業を軸に「日窒コンツェルン」を形成。

本田宗一郎《3票》

ほんだ そういちろう
1906(明治39)年〜1991(平成3)年

関係会社…本田技研工業

1946(昭和21)年に「本田技術研究所」設立。旧陸軍の無線機用エンジンを自転車に装着した「原動機付き自転車」(通称パタパタ)を開発。72年に世界初の低公害エンジンを世に送り出す。経営パートナーの藤沢武夫とともに、独特の社風を築き上げた。

岩崎弥太郎《2票》

いわさきやたろう
1835(天保5)年〜1885(明治18)年

関係会社…三十九商会(三菱グループ)

海援隊で経理を担当。明治に入って「十九(つくも)商会」の経営に携わり、1873(明治6)年に三菱商会と改称。賞与を支給して社員の士気を高めるなど(一説では日本初のボーナスともいわれる)、商人・経営者として手腕を発揮した。

莊田平五郎《2票》

しょうだへいごろう
1847(弘化4)年〜1922(大正11)年

関係会社…三菱商工(三菱グループ)、日本郵船、東京海上火災保険、東京海上日動火災保険、明治生命保険(明治安田生命保険)

岩崎弥太郎から請われて創立間もない三菱商会に入社し、近代的な経営システムを確立した。外遊中に読んだ新聞に教示を受け、当時荒地だった丸の内土地を買い取るよう進言して、丸の内オアフィス街の基礎を築いた。

中上川彦次郎《2票》

なかみがわひこじろう
1854(安政元年)〜1901(明治34)年

関係会社…三井銀行(三井住友銀行)、三井物産、三井鉱山(日本コークス工業)

20歳で渡英し、ヨーロッパの近代的な考え方を学ぶ。帰国後は山陽鉄道の社長に就任。その後三井銀行などの理事になり、不良貸付金を整理、学卒者の採用など近代化を進めた。三井銀行を近代的商業銀行へと変貌させるなど功多く「三井中興の祖」と呼ばれる。

小平浪平《2票》

おだいらなみへい
1874(明治7)年〜1951(昭和26)年

関係会社…日立製作所

久原鉱業所経営者の久原房之助の招聘により同所日立鉱山の工作課長に就任。1920(大正9)年、日立製作所は、久原鉱業から分離し株式会社として独立。国産初となる電気機関車の完成、電気冷蔵庫の開発に成功するなどして国産電気機械メーカーとしての地位を確立した。

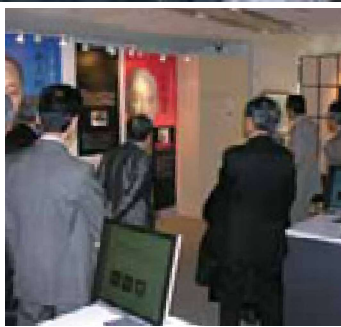
記念講演会

“輝”業家とその時代

期間中の4月25日、企業史料協議会と帝国データバンク史料館の共催により、記念講演会「輝業家とその時代」を開催した。講師は輝業家選出にもご協力いただいた、明治大学名誉教授・財団法人三井文庫常務理事・文庫長の由井常彦先生である。

由井先生によると、明治・大正時代の企業家は類型化すると大きく2つの世代に分けられる。第1世代は渋沢栄一、安田善次郎、大倉喜八郎、岩崎弥太郎、森村市左衛門らである。彼らの特徴は①天保時

代の生まれである②大きな仕事をしている③男爵をもっている④明治維新を大人になってから経験している⑤という点にあるが、出生はさまざまで、農民、商人、地下浪人など階級的な基礎は共有していない



かったと分析されている。

渋沢栄一エピソード

父の藍玉商を少年時代から手伝い、いつ何をいくらで売っていくら値引きしたかをすべて記録。売り先も細かく考えるなど、子どもの時からビジネスに長じていた。その後徳川家の家臣になり、パリ万博に経理・総務として随行。倒幕の知らせにも一人落ち着き、すぐさま予算縮小を実施した。また各地で利回りのいいものを買ひ、お金が増えるように工夫。50箱もの土産を買ひ、江戸まで運ぶ船賃を払っても相当なお金を残して帰途についた。

安田善次郎エピソード

新潟から江戸へ出る際、「江戸は安政の大地震の後でひどい状況だ」と聞いていたが、実際行ってみると江戸の町は活気に溢れて復興景気で盛り上がり、仕事はあるし、何を売っても売れるという状況だった。地元で行商をやりながらビジネスのイロハを学んでいたが、江戸にはビジネスチャンスが転がっていると確信し、江戸でも行商をやり、おかげで町の地図を自然と頭に入れることができた。こ

の経験が後に展開する不動産業で生かされた。

第2世代はもつと若い企業家である、中上川彦次郎（1854年生まれ）、荘田平五郎（1847年生まれ）などが挙げられる。彼らはビジネス能力より広い意味の知識を持っている人で、第1世代と比べれば商才には乏しいが知識や情報で経営していく、世界情勢や学問に通じた、知識豊富な人材が揃っているのが特徴であると分析されている。

中上川彦次郎エピソード

20代でロンドンへ留学したが、学校も行かずにロンドンの町を歩き回り、どの町に何があり、どの企業がどこで繁盛しているかを把握していた。「とにかく情報がすべてだ。ビジネスでも政治でも情報の速さと量ですべてが決まる」と言っていた中上川は、三井に入った際には、この支店からこの支店では電話、この支店は電報を使うようにと情報伝達手段を細かく指示し、最短ルートを把握して何でも情報を集めやすいようにしていた。



来館者から寄せられた

【これからの企業家に必要なこと】

本展会場では、来館者に「これからの企業家に必要なことは？」

あなたはどうか考えますか？」と問いかけた。ご回答いただいた用紙は会場に貼り(写真③)、他の来館者が興味深く見る姿も見受けられた。ここに一部を紹介する。

センス (アルバイト)

お金 (企業家)

人情 (会社員)

誠 (会社員 他3名)

信 (会社員 他3名)

財 (大学生)

ひとを大事にする (会社員 女性)

地・足元を見るの意 (会社員)

七転八起 (OL)

先見の明 (化学器営業)

時代の先を読む能力

人を育てる (会社員)

智 (会社員)

日本人としての
ほこり (学生)

創意工夫と努力 (会社員)

ハンガリー精神 (教員)

繋
人と情報をつなぐこと、
都市と地方をつなぐこと (大学生)

動くこと。考えたことを
行動に移す！ (学生)

良心

なかま (小学2年生)

これらの言葉は、「人を育てる」「なかま」のように人に関すること、「お金」「財」のようにお金に関すること、「良心」「ハンガリー精神」のように企業家自身の心構えに関することの3つに分けられる。

「誠」「智」「信」のように自分自身をしつかり持ち、資金を集め、仲間を集め、育て、そして「時代の先を読む能力」を発揮し、「考えたことを行動に移し」て世の中に立ち向かっていくことが「輝業家の道へのステップなのだ」ということに、来館者の方から気づかされることになった。

【おわりに】

日本の会社展第2回「輝業家―古往今来―」では、これだけの企業家が一堂に会するということが稀有なこともあつて4月25日の最終日まで多くのお客様にお越しいただいた。

来館者の方からは「現在の歴史を思いながら展示を紡いでいくと、企業活動が日本の歴史とどのように関わってきたかが見える」「経営史においても、近代の先達は将来への道標をたくさん残してくれていると思いました」という声をいただいた。



「輝業家データベース」は研究者の方々から好評を得、また時間をかけて展示をご覧になる方も多く、企業家・実業家への関心の高さに改めて驚かされた。

本展で得られたものや、来館者の皆様からいただいたご意見などの課題は、今後の特別企画展にも反映させていきたい。最後に、ご協力いただいた企業、来館者、関係者すべてに、この場を借りてあらためてお礼を申し上げます。

産業遺産探訪 ①

鶴見・川崎 京浜工業地帯

明治から昭和にかけて日本の近代化に大きく貢献してきた産業は、さまざまな遺産を残している。専門家とともに探訪し、その遺産が語る歴史を紐解いていく。第一回は鶴見・川崎エリアの京浜工業地帯を取り上げる。

紙・繊維といった軽工業から鉄鋼・造船などの重工業に大きく舵をきった日本が、初めてインフラも含めて整備した「臨海工業」地帯。そこには今もわが国の重工業の黎明が息つき、経済産業省から近代化産業遺産として認定されたJ・R鶴見線が走る。

『鶴見線物語』の著者、サトウマコト氏と鶴見線をたどり、話を伺った。

京浜工業地帯を 走る鶴見線とは

神奈川県横浜市鶴見区を中心に
ある鶴見駅から、臨海部の工場群を縫うように走る路線がある。総延長9.7kmのローカル鉄道路線、J・R鶴見線である。沿線にあるのは、J・F・Eスチール・東芝・旭硝子・昭和シェル石油・昭和電工などの大きな工場で、これらの職場に勤める従業員の通勤電車としての役割を担っている。終着駅のひとつである海芝浦駅はホームの眼前が海となっているが(写真①)、改札の先は東芝の工場で、駅そのものが私有地であるため、東芝の従業員でなければ駅から出ることができない。また鶴見駅を除いたすべての駅が無人駅である。鶴見駅でサトウ氏は語る。

「鶴見駅西口ミナールビルの最上階には、今でも『鶴見臨港鉄道株式会社』が鎮座しています。不動産事業を手がけていますが、鉄道事業は戦時中に買収されてもう残っていない。それでも彼らは鉄道の文字を社名に残

しているのです」

鶴見線の前身は沿線の各企業が
出資した鶴見臨港鉄道株式会社
が運営する私鉄で、1924(大正13)
年に設立され、翌々年に開業した。開
業時は浜川崎駅と工場地帯を結ぶ
貨物輸送のみの営業で、30(昭和5)
年には旅客輸送を開始し、後に延伸
し鶴見駅に乗り入れたことで利便性
が大いに高まった。

駅名に見る埋め立て 功労者と沿線企業

鶴見線には「浅野」という名前の駅
がある(写真②)。この駅名は浅野セ
メント(現太平洋セメント)を創業、浅
野財閥を興した浅野総一郎に由来し
ている。



『帝国銀行会社要録 第12版』(帝国興信所、1924年)収録の鶴見臨港鉄道の企業概要

「当時、埋め立て地にはその功労から埋め立て者の名前をつけるのが普通でした」

浅野総一郎は欧米を視察した際に、重工業の発展には港湾施設が重要であることを痛感した。帰国後、川崎から鶴見にかけての遠浅の海岸を埋め立て、生産と輸送を直結させた工業地帯をつくる事業計画を思い立った。当時財界の中心人物であり、安田財閥の祖となった安田善次郎の協力を得ると鶴見埋築株式会社を設立し、15年間かけて計画を完成させた。

埋め立て当初は第二次世界大戦後の不況で買い手がつかず、飛行機教



鶴見線 駅名の由来

- 【新芝浦駅・海芝浦駅】芝浦製作所(現東芝)の従業員専用駅であることから命名
- 【昭和駅】昭和肥料(現昭和電工)の企業名に由来
- 【扇町駅】浅野家の家紋「扇」に由来



【安善駅】安田善次郎にちなんで命名

- 【武蔵白石駅】埋め立て事業の功労者で日本鋼管(現JFEエンジニアリング)の創業者白石元治郎に由来
- 【大川駅】渋沢栄一の遠縁で王子製紙の経営者の大川平三郎に由来



習学校や競馬場などに使用。工業地帯の体を成すのは関東大震災後、被災した東京の工場が移転して来るようになってからだった。

鶴見線激動の時代

1937(昭和12)年に日中戦争が始まると工場の数は増加し、鶴見臨港鉄道が乗客輸送を開始した年と比べると、工場数は2.6倍になった。また軍需関係への動員が始まると乗客数も急増し、鶴見線は超満員であった。

日本中で総力戦の遂行に必要な輸送体制が組み立てられ、特に太平洋戦争の開戦と戦局の悪化にともなう強化が進み、鉄道省は全国の私鉄22社を買収して国の管理下に置いた。鶴見臨港鉄道もその対象となり、国有化されて鉄道省鶴見線となる。終戦後、戦時輸送体制が解け、被買収私鉄の払下げ運動が起こったが実らず、国鉄鶴見線となった。

戦後の復興が進み高度経済成長期に入ると、京浜工業地帯にも地方出身の若者や出稼ぎ労働者が大量に流入し、43年に39万人であった川崎市の人口は71年には100万人を突破した。しかし工業地帯の発展は一方で、深刻な公害問題をもたらした。昭和40年代をピークに鶴見・川

崎地区の人口は激減し始める。

工場の近代化とともに臨海部は巨大な装置産業地帯へと変貌し、産業構造が変わっていく。73年のオイルショック以降、合理化や撤退・移転をする企業が増え、工場の空洞化が進んだ。61年にピークだった鶴見線の乗降客数は20年後の81年には3分の1以下にまで減っている。

京浜工業地帯の新たな魅力と未来

今、鶴見線は、京浜工業地帯の夜景スポット(写真③)や海芝浦駅、国道駅など珍しい駅を持つ鉄道として密かな人気を得ている。そして2007(平成19年)、鶴見線は京浜工業地帯のインフラ施設として、経済産業省が指定する近代化産業遺産群に認定された。

『準工業地帯』になれば芦屋ニュータウンのような街がつかれるのに、引込み線にベンベン草が生えていても(写真④)、政府も東京都も神奈川県も『工業地帯』を捨てない。この状態が国家政策と合致しているわけではないので、京浜工業地帯というエリアは大事な産業遺産であり、将来日本が変わっていくときに大化けする可能性を見ているのではない

でしょうか。私はそんな暗黙の了解のようなものを感じるんです」

鶴見小野駅の近くの横浜市立鶴見工業高校は、工業地帯で活躍するエンジニア達を育てることを目的として1936(昭和11)年に設立された学校だが、2011年3月に閉校になる。すぐ近くに理系専門の横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校がすでに開校しており、京浜工業地帯の産業構造が変化している中で、鶴見工業高校は時代の役割を終え、これからは新たな役割を新設の学校が担うということになる。

「横浜サイエンスフロンティア高校は、再来年の春、初めての卒業生を送り出します。ここで人が育ち、この地域をつくっていく、そんなつながりができるといいと思います。時間はかかりますが、原点は教育にあるのですから。」

そう語るサトウ氏の表情に、京浜工業地帯の未来を見た。

サトウ マコトさん

1939(昭和14)年、東京都大田区生まれ。46年横浜市鶴見区に移居住。会社員生活を経て「230クラブ」設立。多摩三浦丘陵歩きの会を主催するほか、『鶴見線物語』『横浜線物語』『鶴見騒擾事件 百科』『第二京浜国道と鶴見めがね橋物語』など著作多数。





名 称：東和タイプライター

製造年：1983年製

寸 法：縦 650mm
横 670mm
高さ 350mm

上部の黒い取っ手（印字キー）を押し下ろすと、活字が下から突き上げられ、インクリボンに当たり、円筒に巻きつけられた用紙に印字される。



学芸員ファイル

FILE No.001

2000文字を操る文書作成器 和文タイプライター

タイプライターと聞いて、まず最初に英文タイプライターが思い浮かぶ人は少なくないだろう。しかし当館で所蔵しているタイプライターは「和文タイプライター」である。平仮名・片仮名・漢字・記号・数字の活字が2000文字以上並んでいる。この活字を1字ずつ拾って文書作成する器械である。

調査報告書の作成に 欠かせない工程

当社は1900（明治33）年の創業以来、信用調査を基幹事業として続けてきているが、その調査結果は「調査報告書」の形で顧客の元へ届けている。1920年代に和文タイプライターが導入されてから、ワープロが普及して92（平成4）年に使用中止となるまでの長きにわたり、調査員が作成した報告書の原稿を、タイピストが和文タイプライターで打ち込んでいた。「浄書」の作業である。全国の事業所では多くのタイピストが採用された。在宅タイピストという勤務形態もあり、午前中に会社へ原稿を取りに行き、1日に3通ほど自宅で作成して翌日出来上がったものを持つていく、というスタイルであった。このタイプライターは札幌支店の在宅タイピストがかつて使っていたものである。

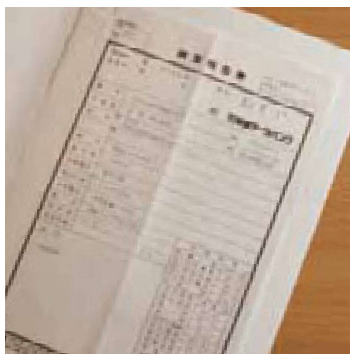
和文タイプライターとは

和文タイプライター第1号機は、杉本京太が

1915（大正4）年に開発したタイプライター（特許第27877号）である。活版技術関係の仕事をしていた杉本は研究を重ね、14年に試作機を完成させ、翌年に実用機を開発したのである。開発してすぐに日本写字機商會を設立して和文タイプライターの販売を始め、2年後には日本タイプライターに改組した。杉本は公式文書に使われている漢字の使用頻度を調べ、そのなかから選んだ2400字を独自の配列で並べた。杉本はこの功績が買われて、特許庁が日本の特許制度100周年を記念して85（昭和60）年に発表した「日本の十大発明家」に選ばれ、木製人力織機の発明をした豊田佐吉、養殖真珠に成功した御木本幸吉らとともに名を連ねている。

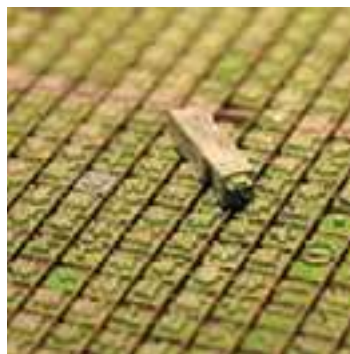
和文タイプライターが登場して以降、タイピストの養成所が出来始め、やがてタイピストは女性の職業となつていった。タイピストは養成所で教育を受けた者だけが従事できる専門職となつた。

操作方法は、まずタイプバーと呼ばれる四角い穴を、打つ文字の上に合わせその位置で印字キーを押し下ろす。すると、選んだ活字が下から突き上げられ、その活字がインクリボンに打ち付けられることによって、プラテン（円筒）に巻きつけられた用紙に印字される仕組みになっている。用紙は現在のコピー用紙よりも相当薄く、手触りは柔らかいものであった。薄葉紙の一種である。一度に複数枚印字する時には、紙の間にカーボンを挟んで対応した。当社の元タイピストのなかには、「二度に7枚重ねて打ったことがある」という者もいた。



◁ 1983年の調査報告書

このようなタイプの報告書は、ワープロの導入とともに姿を消し、現在は紙ではなくデータでの納品も可能になるなど提供媒体も変わってきている。



◁ 和文タイプライターの中に並ぶ活字

文字盤には反転し、かつ上下が逆の状態です。2000文字以上の活字が並んでいる。この状態でタイプバーを文字の上に合わせる作業は熟練を要する。



◁ 福岡支所のタイピスト (1957年)

和文タイプライターの教本には、設置する机のサイズ、照明の採り方、タイピストの姿勢、休憩時間が記載されていた。「タイプライターをのせる台机は、普通の事務机では少し高すぎるので、その高さは0.666m(2尺2寸)が適当している」(『和文タイプライター 初歩から1級まで』)など。

時代とともに

また、字の画数によって、打つ力を調節しなくてはならない点も特徴である。画数の多い字を打つ場合には強く、少ない字の場合には弱く打つ。句読点や数字など画数の少ない字は強く打ちすぎで穴が空くこともあったという。

関東大震災で当社の本社ビルは倒壊したが、その時のことを創業者後藤武夫は「(略)事務所が倒壊したのかと思うと、それは3階の事務室が、19名のタイピストと機械を載せたまま、凄まじい勢いで墜落した響であった」(『後藤武夫伝』)と記している。1923(大正12)年の時点で本社に19名のタイピストが在籍しており、和文タイプライターが世の中に確実に普及していたことを物語る。

しかし戦局が悪化すると事態は変わってきた。38(昭和13)年、国家総動員法によりタイプライターの製造が禁止になり、また敵性語廃止に伴い、当社でもタイプライターのことを打字機、タイピストのことを打字員と改称することになった(写真①『脱俗』第376号、1943年12月)。

戦後はまた需要を伸ばし、小型化、電子化など少しずつ改良が加えられていった。しかしワープロの普及に伴い、和文タイプライターは衰退の道をたどり、タイピストの数は減っていった。ワープロはタイプライターに比べて簡便で扱いやすく、ミスをした場合にも修正ができ、また入力した内

容を保存できるなど、その利便性は上回っていた。当社でもタイピストの確保が難しい、という理由で調査報告書の浄書はワープロに統一されることとなった。92(平成4)年のことである。こうして和文タイプライターは当社での役割を終えた。



和文タイプライターは高価であり、またかなりの重さがあった。男性二人でも持ち上げられないくらいである。そのような理由から官公庁や企業のみでの使用に限られ、一般家庭には普及しなかった。これも知名度が低い要因のひとつである。しかし80年近くにわたって、和文タイプライターが日本語の文書作成において重要な役割を果たしてきたことは間違いない。活字を打ちつけた時の「カーン」という感触、打ち終わりの位置になると鳴る「チーン」というベルの音。パソコンのキーボードを叩く乾いた感覚ではなく、まさに文字を「打つ」という重みを持った感覚である。この「重み」は80年の歴史をも含んでいるように感じる。

当社の元タイピストのこの言葉が印象的だった。「今のパソコンは使っているうちに漢字を忘れてしまうけど、和文タイプライターは逆に漢字を覚えられた」。日本人が生んだこの器械は大正・昭和の激動の時代を支え続けた大発明品である。

参考文献…竹内基『和文タイプライター 初歩から1級まで』1980年 近衛社
浜田広『事務機械工業20年史』1980年 日本事務機械工業会
阿辻哲次『知的生産の文化史』1991年 丸善

一話入魂

帝国データバンクの創業者、
後藤武夫が残した魂をこめた言葉の数々。
そこには信用調査業という事業への
挑戦と苦労の様子が垣間見える。



そもそも興信事業とは何であるか、それは読んで字の如く、
信用興起の目的であらねばならぬ。

実業道德の興隆、信用取引の発達を図る事業である。

私はこの崇高なる目的を以って設立せる自己の事業を

自己の人生観に立脚し、

『大正直大勉強主義』『至誠努力主義』によつて

遂行すべく決心したのである。

『後藤武夫伝』後藤武夫（1928年、日本魂社）

武夫の自伝『後藤武夫伝』のなかの、「興信所とは何ぞや」という節の冒頭に書かれている帝国興信所の経営方針である。幼少期の出来事から描かれたこの自伝には、帝国興信所の創業時のことも詳しく書かれている。

武夫は1900（明治33）年に帝国興信所を創業する前、帝国商業興信所という設立間もない興信所に入社した。しかし興信所とは名ばかりで、不正不義を行い、売上を花札に投じるような会社であった。

「社長の人格が興信所という道德的な職業を営む資格が全然

欠乏せることを確認」（『後藤武夫伝』）した武夫は、世の中に偽善家、贋物がいかに多いかを知る。「世には暗黒な洞穴に隠れて、各種の罪惡を稼ぐものもある。さうした偽りの多い世界に対して、正義を叫び、公正を標榜することは勿論至難には相違ないが、併しそれは男子の事業として痛快なこと」（同）と、「念発起して自ら興信所の設立に至る。上記の言葉の背景には、正義を貫く武夫の性格だけでなく、帝国商業興信所で経験した反面教師としたという点にもあるのだ。

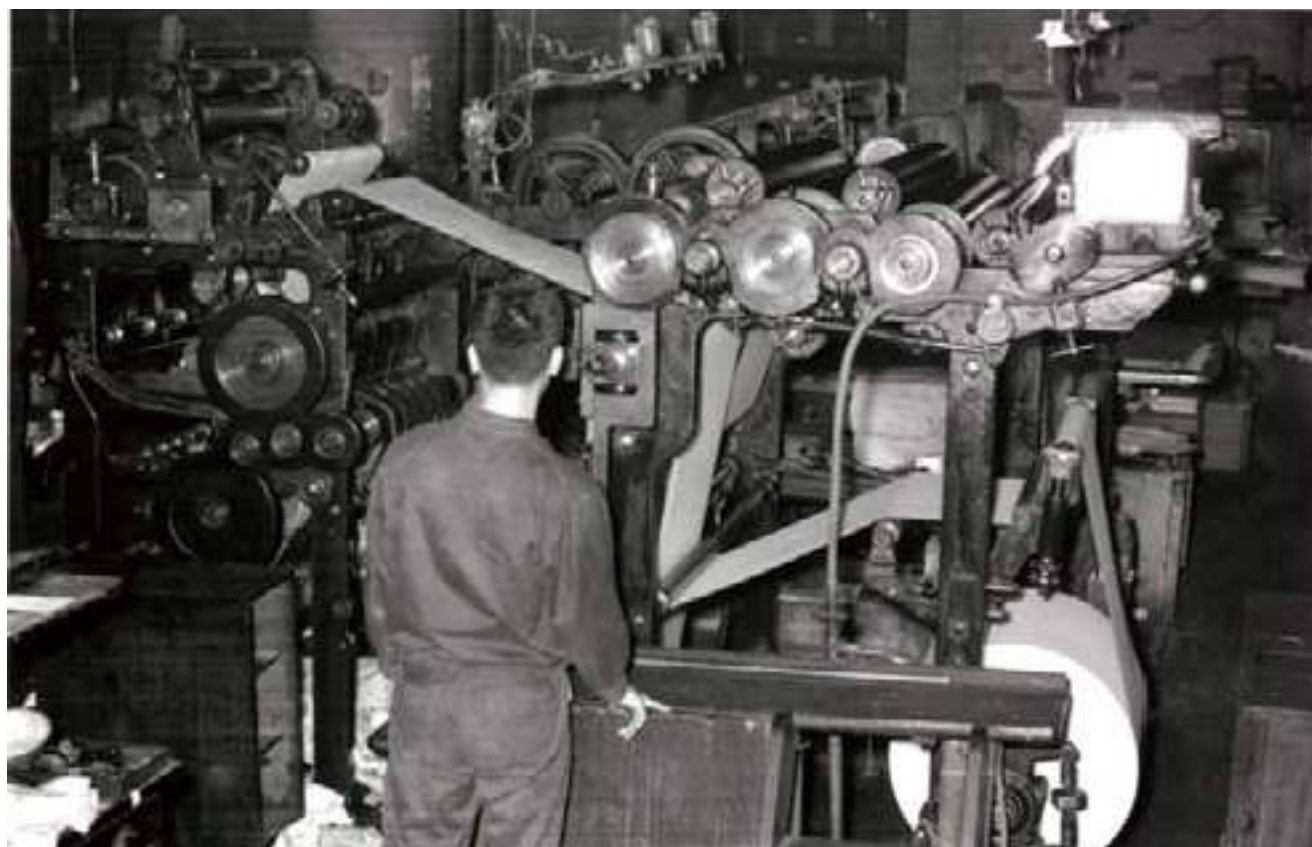
帝国興信所の創業後、業界は日

本銀行からの支援を受けて設立された商業興信所、東京興信所が牽引し続けていたが、興信所の数は飛躍的に伸び、「信用調査業界」が形成されていった。

「興信所」という言葉は、1892年に日本で最初の興信所である商業興信所を設立した、外山脩造が「信用を興す」という意味から使用した造語である。日本でこの言葉が生まれ、武夫が上記のような経営方針を立ててから100年以上経った現在も、信用調査業は信念を変えず、経済界の取引が円滑に進むべく調査活動を行っている。

出版事業を支えた印刷工場

―本社ビル内に置かれた輪転機―



写真は帝国興信所本社の印刷室。輪転機がいくつも並んでいるのが見える。1964(昭和39)年2月21日付『帝国興信所報』(現『帝国タイムス』)掲載の当社の会社案内広告に使用されたものである。ここでは『帝国興信所報』をはじめ、さまざまな出版物を印刷していた。

『帝国興信所報』とは、06(明治39)年に創刊された経済情報紙である。当初は部数も少なくガリ版(謄写版)刷りで間に合せていたが、部数が増えたとそれまでのようにはいかず、本社近くに場所を借り、「株式会社帝国興信所印刷部」と名付けた活版印刷所で印刷していた。創業者後藤武夫は当時のことを「今までのような小規模な非文化的方法では、到底間に合わなくなった。それだけ事業は進展し、範囲は拡大せられたのである」と述べている。

18(大正7)年に竣工した本社ビルの1階にも印刷室を設置していたが、5年後の関東大震災でビルが倒壊し、機械をすべて失った。しかし大阪から印刷機を購入し、約1ヵ月後には仮社屋で印刷を再開した。26(昭和元)年に改築された本社ビルにも地下に印刷室が置かれ、最新式の輪転機を導入したことで、それまで印刷翌日の朝刊として配達していたものが、印刷当日の夕刊として配達できるようになった。情報をタイムリーかつ素早く顧客に届けることができる、自社印刷ならではのメリットである。

史料館TOPICS

雑誌『日本魂』を入手

第19巻6号通巻212号(1934年6月発行)



このほど帝国データバンク史料館は、日本魂社発行の雑誌『日本魂』(1934年6月号)を入手した。

日本魂社は、当社の前身である帝国興信所創業者後藤武夫が、日本の伝統文化や思想を広めるために結成した思想結社であり、実質的に両者は一体の組織であった。『日本魂』は、日本魂社の活動の中心を成す月刊誌で、1916(大正5)年6月に創刊、34(昭和9)年9月の廃刊まで約18年間にわたって延べ219号まで発行された。寄稿者は総理大臣から学者、官僚、文学者、落語家など幅広くその数は延べ5千人以上に上った。

当館には原本としてはわずかに11冊保管されているのみであるが、今回入手の号は廃刊のわずか4ヵ月前の発行という日本魂社の活動の中でも後期に属するものである。当時の日本魂社社長である後藤勇夫による主張「東本願寺問題」に始まり、「夏祭」と題した特集では神田祭や賀茂祭(葵祭)についての寄稿や、時評、読物文芸などで構成されている。

帝国データバンク史料館は、2010年1月18日、東京都より博物館相当施設の指定を受けました(指定番号第49号)。今後も信用調査業の歴史を通じて、経済活動を営むすべての人に信用調査の重要性を認識いただけるよう努める所存ですので、引き続きご愛顧賜りますようお願い申し上げます。



ご利用案内

[入館料] 無 料 [開館時間] 10:00～16:30 (入館は16:00まで)
[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅から徒歩8分 / 中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分
[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分 /
都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分 / 丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

<http://www.tdb-muse.jp/>

 **帝国データバンク史料館**

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。